



【芸術鑑賞会：学校寄席～言葉の使い方、表現の巧みさを学ぼう～】

9月9日（金）午後より、毎年恒例となっている前期課程生対象の芸術鑑賞会を平塚市中央公民館にて開催。今年度は「学校寄席」として、人間国宝の一龍斎貞水（いちりゅうさい ていすい）先生による「立体怪談」、桂歌助（かつら うたすけ）師匠による「落語」、一龍斎貞橘（いちりゅうさい ていきつ）先生による「講談」を鑑賞した。

そもそも「落語」などは「芸術」の様々なジャンルの内「芸能」に分類されており、人間の体を使って表現する技法と辞書などでは示されている。また、「寄席」とは、人を集める場所の「人寄せ場」「寄せ場」が短くなったもので、庶民を対象に大衆芸能として江戸中期頃から興行が始まった。現在は、テレビやラジオでこうした演芸などを放送しており、家庭でも身近に落語などを見たり聞いたりできる。

本校の芸術鑑賞会は、「表現コミュニケーション力」の向上を目指し、様々な芸術性や文化に触れ、「感性を高める」「言葉や表現力を向上させる」ことを目的に開催している。開会前の校長挨拶では、「テレビなどでは味わえない演者の身振りや表情を生で感じながら、寄席といった独特の雰囲気の中で、見るだけ・聞くだけではなく、視覚と聴覚を十分に働かせながら鑑賞し、言葉の使い方や表現の巧みさ、観衆の引き付け方などを学んで欲しい」と生徒に伝え、プログラムが始まった。

はじめは、桂歌助師匠から「寄席入門」として落語と講談の違いや内容について、落語は「落ち」があり、「だじゃれ」で観客を笑わせるが、講談は「学んでもらう場」で歴史や社会で起こった事象などを講談師が演じる場として現在に至っていると解説があり、次のプログラム、一龍斎貞橘先生による講談に引き継いだ。身近な話題から生徒達を引き込み、巧みな話術や釈台

を張り扇で叩き、流れるような調子に乗って話を展開、自然と笑いが出てくる。次の落語では、桂歌助師匠のわかりやすい「だじゃれ」と「落ち」に会場が笑いに包まれる。伝統的な「長屋」の話では、頭の中で情景がリアルに映し出されるとともに「笑い」の期待が高まってくるのを全員が感じたのではないかと。

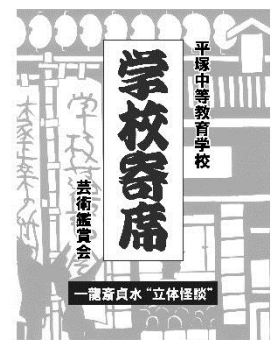
最後に、人間国宝の一龍斎貞水先生による「立体怪談」では、「幽霊」と「お化け」「化け物」の違いを面白おかしく演じ、これも見事に観衆を引き付け、本題である「怪談噺」へと展開していく。その深みのある語り口と迫力ある声柄に併せて舞台演出も加わり、より一層怪談らしく恐怖に包まれた内容となった。

今回の「学校寄席」では、伝統芸能の「落語」「講談」を鑑賞し、笑い恐怖を味わうことができた。10月に行われる翠星祭文化部門では、今回体感した言葉の使い方や観衆の引き付け方を参考に、笑いあり、涙あり、感動ありの学習成果発表会となることを期待したい。



～生徒の皆さんへ、お願いとお知らせ～

- 公演中の他の生徒さんとの私語はつしんでください。
- 当日の生徒さん個人による写真撮影はお断り申し上げます。
- 携帯電話、アラーム付時計等をお持ちの生徒さんは、開演前にあらかじめスイッチをお切りください。



平成 28 年 9 月 9 日（金）
平塚中央公民館

